

日系ブラジル人高校生のアイデンティティと進路選択 — 「特色ある公立高校」とブラジル人学校の比較 —

伊藤 悦子・富永 優花*

Identity and Future-Path Choices of High School Japanese-Brazilian Students
— Comparative Study of Special-Feature Japanese High School and Brazilian High Schools in Japan —

Etsuko ITO and Yuka TOMINAGA*

Accepted July 19, 2011

抄録：日系ブラジル人にとって、使用言語とアイデンティティと進路選択には密接な関連があると予想される。そこで、「特色ある公立高校」とブラジル人学校とで学ぶ生徒たちにインタビュー調査をすることによって、その関連を明らかにすることを試みた。公立高校においては「バイカルチュラルなアイデンティティ」と進路を示す者がいる一方、ブラジル人学校はブラジル人意識を保持し進路については多様であった。これを踏まえ、日本とブラジルとの間を往還する可能性が高い彼らのための教育のあり方について考察した。

索引語：日系ブラジル人，アイデンティティ，進路選択，高校，ブラジル人学校

Abstract : Anticipating a close connection between language use, identity and future-path choices for Japanese-Brazilians, through interviews of students, both at Japanese public high school with Portuguese courses and at Brazilian schools in Japan, we attempt to clarify this connectivity. While the students at the Japanese high school had a “bicultural identity” and indicated a future-path, the students at the Brazilian schools retained a Brazilian identity and their future-paths varied. In light of this, we consider here the education of those who have a high likelihood of transmigration between Japan and Brazil.

Key Words : Japanese-Brazilian, Identity, future-path choice, high school, Brazilian school

* 静岡文化芸術大学文化政策研究科文化政策専攻

はじめに

2009 年現在、日本に住む外国人は 210 万人を超え、そのうち 26 万人がブラジル人である。1990 年に定住ビザが設定され、日系ブラジル人が日本の単純労働力不足を補う要員として「デカセギ」に来て以来、20 年が経過した。「短期で帰るつもり」の定住化」という特徴的な定住形態を持ったブラジル人は、韓国・朝鮮人や中国人とも違う生活課題や教育課題を日本の社会に提起してきた。¹⁾

日系ブラジル人の当初の教育課題は、子どもたちの不就学や日本の学校での受け入れ体制問題であり、これに関わる研究が蓄積されてきた。²⁾ また、受け入れた学校におけるエスノグラフィー研究として、志水・清水 (2001)、清水 (2006)、児島 (2006)、森田 (2007) があり、制度上の問題のみならず、「一斉主義」の学校文化や教職員の課題を明らかにしてきた。

これらの研究は日系ブラジル人の子どもたちの適応・不適応の状況やアイデンティティの問題や学力問題を論じてきた。ただ、これらの研究対象は小・中学生であり、高校生³⁾に関する研究はほとんどない。なぜなら、日系ブラジル人の子どもは言語や学習環境などの問題から「適格者主義」を標榜する日本の高校に進学することが難しく、中学生の段階から就労するものが多いためである。⁴⁾ そうしたなか、日系ブラジル人対象の「特色ある公立高校」も設置され、あらたな進路選択が用意されている。

一方、ブラジル人学校の制度的、実態的課題とともに、そこに通う子どもたちのキャリア選択について明らかにしたものとして、拝野 (2010) があげられるが、アイデンティティについての考察はなされていない。自分が何者であるかというアイデンティティと進路選択は不可分の関係にあり、とりわけ「越境者」である日系ブラジル人の子どもたちのキャリア選択はアイデンティティとの関連からとらえられるべきであろう。

そこで、特色あるカリキュラムを持つ公立高校の生徒とブラジル人学校の生徒へのインタビューを通して、アイデンティティと進路の関係を調査することとした。インタビューという限られた事例の中から、進学率の低さ・中退率の高さという教育課題の背後にある若者や家族の主体的進路選択のありようを考察する。高校段階の若者の自己認識と進路選択は、それまでの教育経験の総括であり、親の教育戦略から脱して自らの将来戦略を立てる出発点でもある。親の教育戦略と自身の意志、そして仲間集団の支え、さらには学校を取り巻く制度や社会的位置などによって、彼らの進路は多様である。二つの文化を見ながら育たざるを得ないということから生じる困難性を明らかにするとともに、その立場を生かすことを目指した「特色あるカリキュラムをもつ公立高校」の生徒から教育の可能性を検討することとする。

1. 日系ブラジル人の教育課題と可能性

(1) 教育課題と可能性

90 年代初期は子どもを受け入れられる場所が日本の公立学校のみという状態で、日系ブラジル人教育の仕組み自体が手探り状態で、不就学・不適応の問題を惹起した。90 年代後半にブラジル人学校が本格的に設置され始め、現在では日系ブラジル人の子どもの教育制度はある程度整えられてはいる。しかし、どちらの学校においても、言語、教育環境、上級学校への接続問題など子どもたちを取り巻く

問題は多い。

日系ブラジル人の子どもが直面する課題としてまず言語がある。日本で暮らしていく中で、言語の壁は教育に大きく影響する。文部科学省の2008年度「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査」によると全国の日本語指導が必要な外国人生徒数は28,575人である。母語別の統計を見てみると、ブラジル人の母語であるポルトガル語を母語とする児童・生徒が11,386人で最も多く、以下、中国語5,831人、スペイン語3,634人となっており、日系ブラジル人の子どもが抱える言語の問題は無視できない。

また、日系ブラジル人の特徴として、親が出稼ぎのために勤務地を転々と変えることがある。そのため、子どもはそのたびに転校を余儀なくされ、安定した学習環境や人間関係を築くことができなくなってしまう。近年の滞在の長期化がもたらす影響もある。親の滞在計画があいまいになっているため子どもの教育方針に一貫性がなく、帰国に備えてブラジルの教育を受けさせるか、日本で暮らすことを前提に日本の学校に通わせるかの選択ができなくなっている。このような不安定な教育環境は日系ブラジル人の子どもたちに自分の居場所をつくることを難しくさせている。日本とブラジルの二つの文化の間を生きる日系ブラジル人の子どもたちは様々な問題に直面することが多い。アイデンティティ形成にも揺らぎを生じさせ、彼らの多くは「私は誰か」というアイデンティティに悩むことになる。⁵⁾

こうした言語の問題や環境が影響して、学習能力も低いと判断されがちである。日本人の子どもの場合、高校進学率は95%を超えている。しかし、「外国人集住都市会議」がおこなった2005年度の調査では外国人生徒の高校進学率は静岡県浜松市が80.4%、愛知県豊橋市が74.5%、愛知県豊田市が80.0%となっており、日本人生徒に比べかなり低いことが分かる。⁶⁾ 高校進学が難しい要因は日本の教育システムがニューカマーの子どもに対応できていないからである。入試をはじめとする適格者主義のもと、言語や学力の面で特別な配慮が必要とされる生徒が高校に参入しにくく、ニューカマーであるがゆえに抱える言語、学力、アイデンティティなどの問題が個人に帰されてしまう。⁷⁾ こうした現状を受けて、近年、行政は入試制度の改善を進めてきてはいるが課題も多い。

一方、「越境者」としての日系ブラジル人の存在は可能性をも秘めている。二言語の生活世界で生きることから、バイリンガルになることも可能であるし、バイカルチュラルな価値観や世界観を持つことも可能である。現に後にみるように、公立高校の生徒たちはバイカルチュラルなアイデンティティを示し、それを生かした進路希望を述べているのである。

(2) 教育環境——「特色ある公立高校」とブラジル人学校

高校段階の学校選択は親の教育戦略と本人の意志とのすりあわせでなされている。そしてまた、選択された学校は、カリキュラムや仲間集団といった教育環境を通して、一人一人の進路を決定づけている。今回の調査対象校の教育環境は「バイカルチュラル」な環境を提示している公立高校と、日本の大学進学をも考慮しているブラジル人学校である。

調査対象の公立高校には英語・ポルトガル語コースが設置されており、日系ブラジル人生徒への対応を試みているという点では先駆的な公立高校である。2007年度から外国籍生徒を対象としたクラスで、設置目的は「母国と日本の架け橋」となる人材の育成である。また、高校卒業後は日本の大学又は本国の大学へ進学することを目標とし、入学試験はポルトガル語での受験も可能である。定員は20名だが、実際に入学している生徒は5～7名程度である。これは入学試験において学校が定める学力基準を満たす外国籍生徒が少ないため、定員数を割ってしまうことが原因である。1年次のみ外国籍生

徒のクラスで、2 年次から外国籍の生徒も日本人生徒の普通科クラスに入ることになっている。ポルトガル語コース以外の日本人対象の高校教育はいわゆる「進学校」の水準となる。そのために、入試の時点で彼らに要求される学力も高くなるのである。2010 年度このコースに在籍する生徒は全校で 16 名、うちブラジル籍の子どもは 8 名、他に中国、韓国、ベトナム、アメリカの生徒が在籍している。

一方、ブラジル人学校は 1990 年後半から日本に私塾として設立され始めた。1999 年にはブラジルの大手私立学校が進出し、そしてブラジル人学校認可制度も導入された。2007 年の時点で全国に 95 校のブラジル人学校が存在する。⁸⁾

ブラジル人学校では基本的にブラジルの教科書・カリキュラムに則して教育が行われる。また学校の形態は全日制、半日制、平日の夕方、土曜日のみなど多様である。ブラジルの教育省による認可を取得しているブラジル人学校もあり、こうした学校はブラジル本国の教育との接続が制度的に保障されているといえる。2007 年の時点でブラジルの教育省の認可を受けている学校は日本国内に 48 校存在し、本稿の調査対象である A・B2 校も認可校である。⁹⁾ したがって、どちらの学校を卒業しても、ブラジルの大学に進学することができ、また一年の補習を受ければ日本の大学を受けることは可能である。¹⁰⁾

小内の調査¹¹⁾では親がブラジル人学校を選択する理由として、「ブラジルで進学するのに役立つ」「ポルトガル語で勉強できる」「ポルトガル語の勉強ができる」が上位を占めている。一方で、日本語能力の向上をブラジル人学校に期待する親もいる。では、公立学校に通うブラジル人の子どもと比較して、ブラジル人学校に通う子どもの意識はどうであるかという点、卒業後ブラジルでの進学を希望する者が多いことがあげられる。ブラジル人学校に通う子どもは母国との関係を保ち、帰国に備えた教育を受けたいという意識がある。また小内の調査ではブラジル人学校の子どもの半数はポルトガル語しか話せないという結果が出ている。ほとんどのブラジル人学校で日本語の授業が行われているが、日常的に日本語が使われている公立学校の日本語レベルに追い付くことはできないのが現状なのである。ブラジル人学校の子どもは日本で暮らしながらもポルトガル語中心、ブラジル文化中心のアイデンティティを形成していることが予想される。

2. 在日ブラジル人高校生へのインタビュー調査

(1) 調査の目的

今回のインタビューでは日系ブラジル人のアイデンティティ形成に関して、教育環境の違いがどのような影響を与えるのかに焦点を当てた分析をする。その際の教育環境とは、教授言語が日本語であるがポルトガル語も学ぶことができる「特色ある公立高校」と「ブラジル人学校」のことを指す。公立高校のなかでも日系ブラジル人への対応を考慮した高校における若者の進路選択に着目した。そして、彼らのアイデンティティの特徴をふまえた上で、それらが彼らの進路選択にどのように関連しているのかを考察する。

(2) 調査対象

今回のインタビュー調査の対象は中等教育課程にあたる 16 歳から 18 歳までの在日ブラジル人生徒 12 名である。対象校は「特色ある公立高校」とブラジル人学校 2 校であった。今回の調査では公立高校とブラジル人学校に通う生徒の進路意識がどのように違うかを比較するために、公立高校 6 名、ブ

ラジル人学校 6 名の生徒にインタビューをおこなった。

(3) 調査方法

インタビュー所要時間は一回あたり 30 分から 50 分であった。使用言語は日本語である。個人面接を基本としたが、ブラジル人学校 1 校については、学校の都合と日本語が話せない生徒がいたため、集団インタビューというかたちでおこなった。インタビューの進め方としては学校生活、小中学校での経験、来日の経緯、家族関係、将来展望、ブラジル人について、日本人について、モデルの存在についてなどの基本的な質問項目を用意した上で、その時のインタビューの流れにしたがって、できるだけ自由に語ってもらう半構造化インタビューの方法をとった。

今回のインタビューは、まず富永の恩師が在籍する公立高校に調査依頼をし、そこで在籍者 8 名中 6 名のインタビューを実施した。インタビューに協力してくれた生徒を介して、ブラジル人学校に通う友人を紹介してもらうという方法をとった。したがって「特色ある公立高校」の生徒についてはあまり偏りはないが、ブラジル人学校の生徒については「公立高校」との比較という観点で分析するとどまる。インタビュー場所は各学校の教室をお借りした。

インタビュー内容は本人の了解のもと、すべて IC レコーダーで録音し、反訳した。なお、本論文に掲載した「公立高校」の「語り」については、該当者が特定化されやすいことを考慮して論文原稿を本人に提示して掲載の確認をとった。

3. 12 名の描く将来

12 名へのインタビューの結果は次表の通りである。今回インタビューした 12 名のうち、日本語とポルトガル語をともに得意とするのは 2 名だけで、10 名は言語がうまく話せないと述べている。公立高校の生徒は日本語よりもポルトガル語の方が話せないと感じ、ブラジル人学校の生徒は日本語が少ししか話せないと感じる生徒が多い。インタビューをした生徒のほとんどは家ではポルトガル語を使用しているが、読む書くの部分では学校で使う言語が、彼らの使いこなせる言語になっている。

日本生まれ日本育ち、いわゆる二世の子が多くおり、公立高校に 3 名、ブラジル人学校に 1 名である。I は日本の学校に不適應を起こしてブラジル人学校に転校しており、ブラジル人学校が日本の学校から疎外された子どもの受け皿になっていることがわかる。一方、「特色ある公立高校」はポルトガル語で受験できるため、両国を往還してきた C も入学している。完全なバイリンガル教育ではないものの、二言語併用を目指している者にとって魅力的な高校になっており、入学動機に「ポルトガル語」が学べることをあげている者が多い。しかし、一方で合格ラインが高いため定員割れを起こしており、外国籍の子どもたちが高校二年生の段階で日本人クラスと統合することなど、カリキュラム上の課題があることも指摘しておきたい。

そうした教育内容の問題を反映して、公立高校の生徒とブラジル人学校の生徒の描く将来の職業には大きな違いが見られた。公立高校の生徒 6 名のうち、進路未定の F を除く 5 名は二ヶ国語が話せるという自分の強みを発揮し、「国際的」な仕事に就きたいと語っている。

A：国際関係とか、せっかく二ヶ国語しゃべれるので、それを活かした仕事がしたいなって思ってます。

B：将来の夢が通訳なので。理由は、あの自分が二ヶ国語話せることを活かそうということで調

インタビュー対象者リスト

事例	学校	年齢	来日歴	学校歴	今後の進路希望	将来暮らす国	その他の留意事項
A	公立高校	16	14歳で来日。	4年までブラジルの小学校。小6から中学まで日本の公立学校。	日本の大学進学希望。専攻は語学系。国際関係の仕事。	日本。	ポルトガル語を学ぼうと入学。
B	公立高校	15	日本生まれ 日本育ち。	5年までブラジル人学校。小5で日本の公立学校に転校。それ以降、日本の学校。	日本の大学進学希望。通訳。	日本。	日本の学校でポルトガル語を学ぼうと入学。
C	公立高校	17	1歳半で来日。 9歳で帰国。12歳で再来日。	日本の保育園。小3まで日本の公立学校。3年から6年までブラジルの学校。6年から8年までブラジル人学校。中2から日本の公立学校。	日本の大学進学希望。専攻はスペイン語。国連の仕事。	日本。	大学進学を目指すため進学校を選んだ。
D	公立高校	17	4歳で来日。	ブラジル人幼稚園。小学校から中学まで日本の公立学校。	日本の大学に進学し、ブラジルの大学院に進学希望。外交官。	ブラジル。	ポルトガル語を学ぼうと入学。
E	公立高校	18	日本生まれ 日本育ち。	日本の幼稚園。小学校から中学校まで日本の公立学校。	日本の大学進学希望。専攻はスペイン語。世界を飛び回る仕事。	日本。	ブラジルのことを学ぶために入学。
F	公立高校	18	日本生まれ 日本育ち。	日本の保育園。小学校から中学校まで日本の公立学校。	日本の国立大学進学希望。職業は未定。	日本。	親から勧められて入学。
G	A校	17	2歳で来日。 12歳で帰国。 16歳で再来日。	小5まで日本の公立学校。6年から高2までブラジルの学校。高2からA校。	日本で数年間就労後、ブラジルの美容の学校へ進学。	未定。	高校入学時、専門学校に行きたかったが父の失業で断念。
H	A校	17	10歳で来日。	4年までブラジルの学校。小4からA校。	ブラジルの大学進学希望。専攻は薬学。来年受験予定。	ブラジル。	英会話に通う。高校卒業後アメリカに短期留学予定。
I	A校	18	日本生まれ 日本育ち。	日本の幼稚園。小1まで日本の公立の学校。1年からA校。	日本の自動車の専門学校に進学希望。自動車整備士。	未定。	日本の学校が嫌になり、A校に転校。
J	B校	17	15歳で来日。	8年からブラジル人学校。高1からB校。	ブラジルの大学進学希望。専攻は化学。来年受験予定。	ブラジル。	日本語が話せず、日本で暮らすのは難しいと思っている。
K	B校	17	12歳で来日。	7年からブラジル人学校。高1からB校。	日本で就職する予定。自動車関係の仕事。	日本。	絵のデッサンを習っており、それを活かした仕事がしたい。
L	B校	18	5歳で来日。	小1まで日本の公立学校。小1からB校。	ブラジルの大学進学希望。専攻は歴史。来年受験予定。博物館の仕事。	ブラジル。	くもんに通ったが漢字が難しく断念。

べていたら出て、通訳、翻訳とかが出て、なら通訳みたいな感じで。

C：国連とか。国際関係の仕事とかにつきたいと思ってるんです。

D：職業何になろうみたいな、あれで、ずっと通訳とか考えてたんですけど、外交官の仕事に興味持って、じゃあ外交官目指そうってなって。

E：大学に入ったら、まあ、大学では語学を勉強して、で、将来はなんかできたらちょっと世界を飛び回れるような仕事をしたいなって思ってます。

「特色ある公立高校」の教育内容の試みがトランスナショナルな進路展望を助けており、関口（2003）が「帰国子女学校」である K 国際中学校で見いだした「バイカルチュラル・アイデンティティ」が育っていることが B や C の言葉からわかる。

B：日本とブラジルの、架け橋となるような、人材を集めているというか、育成しているというので、私も、そこに、当てはまるのかなと思って、進学しました。

C：やっぱその将来の夢が、母国と日本の架け橋になるっていう、ちょっと抽象的なんですけど、やっぱ、ここは進学校じゃないですか。やっぱ、そうやってここを通して大学を目指そうと思ひまして、で、ここを希望しました。

今回のインタビューで日本の大学進学を希望する生徒は公立高校の生徒 6 名であり、ブラジルの大学進学を希望する生徒はブラジル人学校の 3 名であった。

現在、日本政府による認可を受けたブラジル人学校の中等教育課程修了者に対しては、条件付きで一律に高等学校卒業程度認定試験を免除する措置をとっている。今回調査した 2 校は共に認可校であったが、実際には言語面と金銭面で困難があり、ブラジル人学校から日本の大学へ進学する選択肢はあまりなく、現に H はインタビューでブラジルの学校に行っている以上、大学に進学するのならブラジルと述べている。

H：今は科学の方で行きたいので。そう、ブラジルの方がね。今、ブラジル学校で勉強してるもので、ブラジルでやったほうがいいかなと。

一方、ブラジル人学校の生徒の職業選択は多様であり、美容関係、薬剤師、自動車関係、博物館の仕事など、職業の統一性は見られず、自分の興味のある分野に進もうとしている。ブラジル人学校の生徒は自分が国際人であると特別に自負してはおらず、あくまでも自分の興味のある分野の仕事に就くことを希望していると考えられる。

G：エステシヤンっていうのかな。美容系のところで働きたいんですけど、私は先にもっと、英語の勉強とかしたいので。まだあの、ほんとは何するのか分らないんですよ。留学か、そっちの学校に行くか。美容系の学校に行くか。

I：えーと、トヨタの専門学校入って、車のことをいろいろ勉強して、そのあとはここに残るか、ブラジル戻るかそれから決めたい。

ただし、日本で就職する予定の K は日本で暮らすのであれば日本の学校の方がいいことを主張する。

K：えーっと、日本に住んでたら日本の学校の方がいい。（中略）ずっと、日本に、もうブラジル帰らないね、だから、日本の学校の方がいい。じゃあ、二人（J と L）はブラジル帰りたいね、だから、ブラジルの学校の方がいい。

ブラジル人学校については、宮島（2002）や佐久間（2006）がその問題点を指摘してきている。また、ブラジル人学校を調査した拝野（2010）は『非熟練労働者を生産する場』と形容されるように日本の社会的底辺層を再生産する装置としての機能を有していることは事実である。」¹²⁾ と指摘し、ブ

ラジル人学校の教育内容の修正を提起している。

事実、ブラジル人学校の生徒に日本で働くならどのような職業に就くか尋ねたところ、多く返ってきた言葉が「会社」であった。今回インタビューをしたブラジル人学校の生徒たちが使う「会社」という言葉は「単純労働者が働く工場」のことを意味していた。

公立学校の生徒は日本での学歴によって進路が開かれる場合があるが、ブラジル人学校の生徒は日本の教育を受けていないため職業の自由が狭まる。だが、ブラジル人学校が日本の学校から排除された子（I や L）の受け皿になっている点、そしてブラジルの大学に進学する道を提供している点も見逃すことはできない。

トランスナショナルな子どもたちへの対応が求められているのは、日本の公立学校のみならずブラジル人学校でもあることが確認できる。

4. 4 タイプの日系ブラジル人高校生

ここからは、生徒たちのアイデンティティと進路選択との関連をより明らかにするため具体的な 4 つの事例を通して見ていくことにする。ここで取り上げる 4 名は、日系ブラジル人高校生という同じ立場でありながら、アイデンティティが大きく異なっている。日本での定住を決意し、自己肯定感が強い B、アイデンティティに葛藤していて自己否定感が強い F、ブラジル社会の問題を見つめながらブラジル人として生きようとしている G、明確にブラジル人としてアイデンティティを形成し自己肯定感が強い H の 4 名である。

【B の事例 : 日本に定住し、両国の架け橋になる】

B は公立高校の 1 年生である。日本生まれ日本育ちで、小学 5 年まではブラジル人学校に通っておりブラジルの教育も受けた経験がある。彼女は現在、日本で暮らしていくことを決めており、日本の大学進学を希望している。

B : ああ、（転校した）きっかけは、私があの、ブラジルにあの行こうとは、戻らないことを決めたので、親は日本で暮らしたいなら、日本語学校に通った方が、いいって言われたので日本語学校に進学することに決めました。（中略）日本語学校に進学するなら、ちゃんと覚悟を決めなさいって、日本で住むなら覚悟を決めなさいって、言われました。なんか、途中であきらめるのではなくて、最後まで通す、ことを言われました。

こうした B の自分に対する覚悟は、「通訳になる」という将来の夢へと結びついている。それは在日ブラジル人社会で「通訳」をしている母親をモデルとし、両国の「架け橋」を目指すことにつながっている。

B : 母は職場では、少し日本語がしゃべれるので、ときどき通訳として、働いているんですけど、時に日本人とも外国人とも、差別、なくて、同じく接するので、その、そういうところを私は尊敬します。あと、関係なく人を助けようと思う気持ちもすごい表れていて、そういうところも、私、尊敬します。（中略）まずは、日本に住んでいるブラジル人たちへの、助けとなるような、人物を目指しています。

B は日本人化していながらも、ブラジル人という自己に否定感情は抱いていない。ブラジル人学校に通った経験があるため、ブラジル人学校の友人もいる。日本とブラジル、両者を肯定的に見ること

ができる B はバイカルチュラル・アイデンティティを形成しているといえる。B 自身、そうしたバイカルチュラルな自己を認識しており、二カ国をつなぐ通訳という仕事を選択したといえる。また、B の両親は B に「日本で住む覚悟を決めなさい」と助言するように、将来展望を明確に持っている。両親のこうしたはっきりとした態度は、B に精神的な安定感をもたらしている。

そうした B は部活動も週一回しかない部を選び、できるだけ勉強する時間を保つようにしている。だが、自分の学力では日本人生徒と同じようにはいかないと感じている。特に国語と日本史が苦手である。B は日本生まれ日本で育ちで日本語も堪能であるが、家での会話にポルトガル語を使用しており、小 5 まではブラジル人学校で教育を受けてきている。そうした環境の違いが日本人と比べて勉強が難しくなる原因になっている。まさに宮島（2005）が指摘するように日本史の用語のような社会文化的言語は、外国人にとって困難な言語なのである。

日系ブラジル人の定住化が進んでいる今、B のように日本生まれ日本で育ちの子どもが増加していくだろう。しかし、自己肯定感が強く前向きな B であっても、日本人と自分を比べて劣等感を持っている部分があり、日本人になりきれない部分について補おうとし、そこにハンディを感じている。しかし、B はそのハンディを克服してバイカルチュラルを目指すという強い意志があるため、自己肯定的で進路展望も明確にすることができている。これからの在日ブラジル人の一つの進路モデルと位置づけることができるだろう。

【F の事例 日本に帰化したいが、進路は未定】

F は公立高校の 3 年生である。日本生まれ日本で育ちで、保育園から現在まで日本の学校に通ってきた。公立高校には親の勧めで入学しており、今後も日本で暮らしていくと決めているが、自分が将来的に何をやりたいのかが分からずに悩んでいる。F はインタビューの中で将来への不安を述べるが多かった。彼は将来のことだけでなく、何事にもやる気を感じていないという様子であった。大学受験もやる気はなく、今年は浪人するつもりだと語っている。

F：やりたかったこと。まじ、やりたいことがなんなのかわかんないんですよね。自分がなにをしたいんだろうって。今でも悩んでいます。それでも見つかりません。

この不安は、F が自らのもつトランスナショナルな背景を肯定的にとらえることができず、日本人でありたいと強く願っていることと関連している。F は 20 歳になったら日本人に帰化し、自分の名前も変えるつもりでいると語っている。今の自分は好きではないという発言も多く、彼は帰化して名前も変えることで新たな自分になりたいと熱望している。

F：20 歳になったら帰化したいですね。名前も変えて。その F（氏名）ってのは、なんだろう……一応それまで生きてきた自分の、一部でも、一部なんですけど、だけど、帰化することで、日本人になるじゃないですか。だけどそれは、日本人になったところで、それまでの自分が、変わるかどうかっていうと、多分変わらないと思うんですけど、だけど、名前を変えるってことで、これまでやってきたことは変わらないけど、これからすることとかは、変わるのかなって変えたいなってそういう、なんだろう決別かな。決別、まあ過去の自分を否定するわけじゃないですけど、まあ、新しく……、新しく自分を始めるためにも、新しい自分も必要になって僕は思いますね。

F は自分のことをブラジル人として見ておらず、ブラジル人であることを否定する発言が多い。本論では本人の意向で詳述できないが、この帰化志向の背景には日本の学校における F の体験が深く関わっている。F は帰化して名前を変えるという行為によって、自らのアイデンティティを確立させよ

うとしている。

F はインタビューのなかで「普通」という言葉を多用している。一方、現実には F 自身が日本において外国人という「普通」でない状況に置かれているジレンマがある。F はブラジル人の典型的なイメージと自分を比較し、それと自分が異なることを主張している。

F：それ逆ですね。あー、自分は日本人よりなんだなって、そういうことが、まあ中学 3 年から高校に入ってからが、そういう風に思うことが、多々ありましたね。たとえば、ブラジル人って基本的になんだろう、こう、テンションが高いていうか、基本におおらかっていうそんな感じが、イメージ的にあると思うんですけど、でも、僕はそんなあんまり、騒ぐのがすきじゃないし、そこまでおおらかじゃないし、そうですね。なんだろう。普通のブラジル人と比較したときにだいぶ違うと思いますよ。なんか、考え方が、母親に、考え方が日本人だねって言われましたね。(中略)でも、僕はそんな・・あんまり、騒ぐのがすきじゃないし、そこまでおおらかじゃないし、そうですね。なんだろう。普通のブラジル人と比較したときにだいぶ違うと思いますよ。(両親は)普通の日本人の家庭と同じくらいに僕のことを考えていたと思いますよ。一応、塾とか通わせてくれましたし。

彼の中で「普通のブラジル人」と「普通の日本人」という判断基準が存在し、自分の家庭を「普通の日本人」と同一化していることから見ても、自分は「普通の日本人」に属するという意識を持っていることが分かる。だから、自分のアイデンティティに沿うように、帰化と名前の変更を考えているのである。

しかし、ブラジル人だから日本人だから、という判断の仕方が嫌いだという F は、人を見るときその人の中身を見るように意識しているという。こうした F の人に対する見方は、自分自身が他人から先入観で判断されたことによると考えられる。

F：ブラジル人とか、そういう国で、人を見るってのは僕の中では、どうかなって思うんですけど、だけど、その国のそれがあって、その人の性格がこうなってしまったのはしかたないじゃないですけど、しかたないって言葉で決めるのはおかしいですけど、でも、その人がその人であるのは、その国の文化とかもあるし、習慣もあって、その人の影響ってのがあると思うので、なんで・・なんだろう、一応その「人」を見るよう僕は努力してるつもりですね。

F は国籍・容姿・宗教・性別などの属性で人の価値が決められることに嫌悪感を抱いている。背景にあるものではなく、その「人」を見るというスタンスは、F 自身が他者に対して求めているスタンスであるいえるだろう。日本人とブラジル人との境界のはざまにいる F は、世の中の偏見を直視してしまい社会に魅力を感じることができなくなり、進路展望を描けない要因になっている。

こうした F の葛藤状況が個人的な経験ではないことを、現在定時制高校に通う笹渕アンドレ順が指摘している。「わたしのようない日二世の世代は明らかに一世の世代とは気質というか、雰囲気は異なるようです。同族嫌悪というか、ミドルネームを隠したりあからさまに同じブラジル人を避ける人もいます」。¹³⁾ そして笹渕自身は「ブラジルと日本の間で心身ともに揺れ続ける私ですが、最後の最後という時がくれば日本を選ぶでしょう。(中略)強く『日本人になりたい』わけでも『ブラジル人をやめたい』わけでもないのです。しかし、いつまでも「間借り人」である人生だけは送りたくないのです。デラシネ(根無し草)でなく腰をすえて、世界の中の定まった地(日本)で生きていきたいと決めました。」と語っている。¹⁴⁾ 笹渕はブラジル人であることに否定的ではないが、F と同じく、移民二世としてデラシネにならないこと、アイデンティティを確立することが生き方の根幹に関わってい

ることを示唆している。

ただ、F の語りは「いま、ここ」での語りであり、F が日本に帰化することもあくまでも予定である。F は日本人への同一化を志向し、進路展望も日本の教育制度に沿った日本の大学受験を考えているが、アイデンティティの動揺によって自分の将来が明確に描けない。F のように、一見日本の学歴社会のなかで不自由な立場にいる外国人生徒であっても、アイデンティティの葛藤から逃れられないのである。しかも、彼の悩みは「特色ある公立高校」に入学したからこそ、引き起こされた可能性もある。自らのブラジル人の部分を否定してきた F が「特色ある公立高校」で否定できないブラジル人に会ったことは重要である。「特色ある公立高校」の仲間集団が作る雰囲気が意図せず、F にアイデンティティ葛藤を引き起こし、新たな内省を引き起こしたとみることができよう。

【G の事例 ブラジル人として責任を持って進学】

G は A 校の3年生である。2歳のときに来日し、小6でブラジルに帰国、そして高2で再び来日しており、来日と帰国を繰り返してきた経験を持つ。G は「勉強をしたい」という言葉を多く発言している。

G：今はやってないですけど、来年ぐらいにはちゃんと英語の、勉強と日本語の勉強もちゃんとやりたいなと思ってますよ。

G：私、自分ではあのやっぱりちゃんと勉強を、先に優先してから、やっぱりちゃんと働いた方がいいかなと思ったりはします。

しかし、G は勉強に励んでいるにも関わらず、高校卒業後は就労するつもりである。ブラジル人学校から日本の大学進学は不可能ではないが、入学は高い壁である。こうした現状から G の中には日本の大学進学という選択肢はない。以前、G は日本の専門学校に進学を希望したが、父の失業で諦めた経験がある。ブラジルに帰国する予定であり、ブラジルに帰って進学したいと考えているが、資金を貯めるために A 校卒業後、日本で数年就労するつもりである。自分の置かれている環境に適応せざるをえないと G はどこかで認識している。ただ、母親の期待を受けて大学進学を目標としてもいる。

G：まあやっぱり勉強の方が厳しいです。お母さん。お姉ちゃんにも厳しくしてます。お姉ちゃん高校やめたからね。お母さんにとっては、ちょっと、なんか足りないかな。お母さんの夢はちゃんと私たち大学に行く夢があるから、お姉ちゃん高校辞めたのは、自分の夢がちょっと諦めちゃったと同じ感じだからね。

G の父親は近年の経済危機で失業しており、母親も現在仕事を探しているが見つからない。G の母親は、こうした自分たちの経験から、子どもたちにはきちんと学問をさせて社会に出たときに仕事が見つかるようにしておきたいと思っているようだ。G はインタビューの中で母親の意見を述べることが多く、母親の影響を強く受けていることが分かる。彼女の将来に対する現実的な判断力は、こうした日頃からの母親の言葉が基盤となっている。G は将来についてそれほど大きな夢は語らず、自分の現状からどのように切り開いていけるかを考えている。

こうした母親の影響は、在日ブラジル人社会への G のまなざしにも表れている。それは、日本とブラジルの間を往還している人々への批判的なまなざしである。

G：（日本に住む日系ブラジル人は）困ったことがあったら、手放して日本に帰っちゃうタイプの人が多くて、お母さんはそういう人じゃなくて、ちゃんと努力できる人に育ってとかは言います。で、私も多分、ブラジルに去年、帰ったから、みんな努力して勉強したり、いい仕事探したり、そういう努力する姿を、いろんな見てきたので、やっぱりこっちにいる人は、そ

んなに努力しないのかなって思ったりはします。

出稼ぎに来ている日系ブラジル人が皆、努力せずにどっちつかずの生活をしているわけではない。しかし、一部のそうした動向を G は責任感のない行為として認識している。G の家族自体も日本に出稼ぎにきている状況にある。G にとっても日本での生活は自己の理想との矛盾をはらんでいる。前向きな G であるが、葛藤も大きい。勉学に励もうという姿勢も現状を打破しようという焦りと関係している。日本とブラジルを往還する日系ブラジル人のあり方と自分を区別しながらも、自分の基盤をブラジルに置くことでアイデンティティに安定感をもたらそうとしているのである。

【H の事例 当然ブラジルに帰国して進学】

H は A 校の 3 年生である。小 4 のときに来日し、来日して 8 年になる。来年の秋にブラジルの大学入試を受ける予定で、大学に進学したら薬学の道を進もうと考えている。H は日本を「海外」と呼び、自分の母国はブラジルであると認識している。日本にやってきたのが小 4 ということもあり、アイデンティティの基盤がブラジルで確立されていたと考えられる。日本での「海外生活」を肯定的に語ってくれた。

H：（日本で暮らしてきて）あー、すごいよかったなって思うんです。（中略）まあ、日本語を勉強と、まあ、経験として、海外を、海外に住むことがすごい経験になるもので、それがすごいいいと思います。違う文化も学んで。

H にとって、自分はブラジル人であり、日本にいるのは異文化を学ぶことができる留学体験のようなものとしている。H はあまり日本人化しておらず、日本の学校に通う在日ブラジル人の子どものことを「変わっている」と表現する。

H：ちょっと変わってるかな。うちらと。えーと、どうでしょう。まあ、特には似てるけど、まあ、日本人っぽいね。で、こっちの子（ブラジル人学校の子）がもっとブラジル系なんでそこが違うかなと思うんですけど。

H は日本の学校に通う日系ブラジル人や日本の友人がいない。つまり、同世代ではブラジル人学校の仲間としか交流がないのである。他のコミュニティに対する関心が薄く、H のアルバイト先の中国人に対しては否定的な感情を抱いている。H 自身がトランスミグラントであるにもかかわらず、ブラジル人社会だけで生きているがゆえに、「自分は何者か」というアイデンティティに揺らぎが生じないのである。この点、H は進路に関しても多くの選択肢から選ぶ必要がなく、迷いが生じていない。

そうした迷いのなさは、「生い立ち」が「普通」であるという表現から読み取れる。

筆者：自分の生い立ちについてどう思いますか？

H：うーん。どうでしょう。まあ、普通、普通くらいだと思います。

筆者：それに（ブラジルで自分が日系人ということに）ついてはなんか思う？

H：あー、ないですね。普通。まあ、日系の人がいっぱい、いっぱいいるもので。

H は日系ブラジル人コミュニティの中で常にくらしているため、出稼ぎで一時的に日本にきていることも特別なことだとは思っていない。日本社会においてもブラジル社会においてもマイノリティの立場にいるのだが、H 自身の認識では自分はマジョリティ（普通）の立場にいることになる。日系ブラジル人コミュニティに囲まれて育ったために、アイデンティティの揺れはあまり生じなかったのである。したがって、将来展望もブラジルに帰国して大学に進学するという「普通」の展望となる。

H：えーと、いい仕事をして、で、家族も作って、で、うん、幸せに暮らしたいです。（中略）まあ大学行って、卒業して、で、その勉強をしたことを、使って仕事をする。

H はブラジルの学校で教育を受けたのだからブラジルの大学に進学するのが当然と考え、日本の大学進学は視野に入っていない。H は自らの進路展望を明確に持っているが、背景には父の存在がある。H の父親は日本では単純労働者として働いているが、ブラジルでエンジニアの仕事をしていた。日系ブラジル人はブラジルで専門的で高度な職につけるのに対し、日本では工場で単純労働の仕事しかないという現実が、H のブラジルでの進学を強く後押しをしている。H にとって、いい仕事に就くということはブラジルでしか実現できないのである。こうした進路展望からも、H はブラジル社会へのシンパシーが強く、ブラジル人としての強いアイデンティティを形成しているのである。

【事例からの考察 アイデンティティの軸と多様性】

以上、4名の事例からそれぞれがブラジルと日本の狭間に位置しつつ、どのようなアイデンティティを確立しつつあるかを見てきた。この場合のアイデンティティとは「自分が何に属しているか」という社会的帰属に関わる問題である。これまでの在日朝鮮人研究は、多様化する在日社会のなかで「国籍・民族としてのルーツ・文化（言葉）」をアイデンティティの軸として考えてきた。¹⁵⁾ しかし、日系ブラジル人の場合、「民族のルーツ」よりも「生活基盤としての居所」そして、「生活を支え合うコミュニティ」がより重要になっていることが伺える。そしてまた、彼らが「国籍」や「民族」といったくくりではなく、「言語」と「進路の中身」で「生活基盤としての居所」を考えていることがわかる。

つまり、日本とブラジルとを往還する際に問題となる生活の具体像から導かれているのである。それゆえに、滞在年数、あるいは滞在計画、将来計画によって多様になる。4名の事例はそれぞれの置かれた状況のなかで、それぞれが模索している「一応」のアイデンティティであるが、それは「いま、ここ」のものであり、今後とも変化するのである。日本とブラジルという二項対立の図式で彼らを判断することはできない。日本とブラジルの狭間で、いくつかの具体的な軸によってグラデーションのように描かれる、多様なブラジル人が日本に定住しつつあることを確認したい。

結論と残された課題

最後に、今回のインタビューを通して学校教育のあり方を考えたい。

第一に、言語に関しては、学校で使用する言語が生徒の使用言語に大きく影響し、使用する言語の国にアイデンティティが近づく傾向があることが確認できた。インタビューをした日系ブラジル人生徒たちはポルトガル語と日本語、両方使えることが多かった。しかし、言語は学校で学習することで文法的な確立がなされ、確実な言語習得につながる。よって学校の教授言語が彼らの第一言語になっていることが多い。今回の調査では学校の違いによって将来暮らしたい国が分かれた要因は言語の問題が大きいと考えられる。

また、大学進学が今後暮らす国を決める転機となっており、それが将来展望にも影響してくることが確認できる。ブラジル人学校の生徒で大学進学したい者は全員ブラジルへの帰国を選んでいる。逆に日本の学校の生徒は全員が日本の大学進学のみを考えていた。ブラジル人学校の生徒は日本の大学入試を突破する日本語能力を持つ者は少ないため、結果的にブラジル本国の大学を選択することになり、日本の高校の生徒は日本語能力があり日本社会にも適応しているために、あえてブラジルに帰国して大学進学する者が少ないのである。

従って、日本に定住する可能性の高い二世（日本生まれ日本育ち）の子どもたちへの日本語保障は、ますます重要な教育課題である。不適應の大きな原因は日本語が分からないことにある。また、学力に関しても基盤となる日本語の力に大きく影響されている。「架け橋」になることを目指す場合ですら、日本語の保障は必要条件である。

ただし、日本語さえ保障すればいいのではなく、彼らが安心できる「居場所」に日本の学校がなければならない。学力の高い子においても自己肯定感の育成に関する課題が大きいことを忘れてはならない。今回の調査対象は日本とブラジルの間を生きるという生い立ちは共通しており、全体を通して共通点もある。しかし、自分の生い立ちをどう捉え、これからに生かしていくかという点では一概にまとめることはできない。今回の調査で、日本の公立高校とブラジル人学校に通う高校生のアイデンティティにはかなり違う特徴が見られたし、彼ら自身がお互いを「変わっている」と表現するほどの違いがある。そしてそれらが今後の自分の将来、進路選択にも影響を与えている。

一方、日系ブラジル人の子どもを取り巻く教育環境は不十分である。例えばブラジル人学校の生徒の場合、日本の学歴がなく、日本語が話せないのでは職業選択は狭まる。どちらの学校も生徒の「トランスナショナルな移動」を想定した教育内容を準備する必要がある。彼ら自身が述べているように「両国の架け橋」あるいは「定住ブラジル人の役に立つ」という進路が模索されつつある。それは、日系ブラジル人の新しい生き方の可能性を示しているといえよう。そうした彼らの意志が実現できるような教育環境をきちんと整える必要性が出てきているのだ。

最後に、今回のインタビューは日本語が話せない生徒のデータをあまり集めることができなかった。ブラジル人学校のなかでも日本語が堪能な者にしか調査ができていないという限界がある。進路選択が限られてくるとい点では、むしろ彼らの方により課題は多いと想像される。そうした日系ブラジル人も含めて、自己肯定的で豊かな進路を実現するためにはどういう教育が必要であるかを今後も追求していきたい。

謝辞

今回、本論文執筆に際して、「特色ある公立高校」およびブラジル人学校の先生方には大変お世話になった。インタビュー対象の生徒を紹介していただいたばかりでなく、場所の提供や原稿の確認などにも協力いただき感謝申し上げたい。そして、もちろん、自分たちの生い立ちや気持ちを率直に語ってくれた高校生の皆さんにも感謝申し上げる。

参考文献

- 太田晴雄. (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』 国際書院.
- 小内透. (2009) 『在日ブラジル人の教育と保育の変容』 (講座トランスナショナルな移動と定住一定住化する在日ブラジル人と地域社会 第2巻). 御茶の水書房.
- 児島明. (2006) 『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー—』 勁草書房.

児島明 (2008) 「在日ブラジル人の若者の進路選択過程 学校からの離脱 / 就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』(1) pp.55-72.

志水宏吉・清水睦美 (2001) 『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.

志水宏吉編 (2008) 『高校を生きるニューカマー』明石書店.

清水睦美 (2006) 『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界—』勁草書房.

杉岡正典 (2007) 「対日日系ブラジル人親子の進路意識と学校適応感との関連—地域間および学校間比較を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』3 (56) pp.263-272.

関口知子 (2003) 『在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店.

拝野寿美子 (2010) 『ブラジル人学校の子どもたち—「日本かブラジルか」を超えて—』ナカニシヤ出版.

朴三石 (2008) 『外国人学校—インターナショナルスクールから民族学校まで—』中公新書.

宮島喬 / 太田晴雄編. (2005) 『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題—』東京大学出版会.

森田京子 (2007) 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社.

- 1) 児島 (2006) このような日系ブラジル人の渡日の特徴を「一時的回帰の物語」とし、「デカセギ」と「永住」の狭間で揺れ動く家族の教育戦略を追求している。本稿はそうした問題関心を共有するとともに、学校環境と子ども自身の意志に着目して考察する。
- 2) 太田晴雄 (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院 参照。
- 3) 本論でいう高校生とは日本の高等学校に在籍する生徒、およびブラジル人学校中等課程に在籍する生徒をいう。ブラジルでは7歳から入学する8年制の初等教育課程のうえに、3年制の中等教育課程があり、ブラジル人学校の生徒は中等教育課程の生徒となる。
- 4) 就労している日系ブラジル人の若者に対する調査として、児島明 (2008) 「在日ブラジル人の若者の進路選択過程 学校からの離脱 / 就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1号参照。
- 5) 関口知子 (2003) が、トランスミグラントな日系ブラジル人の特徴とアイデンティティの問題を実証的に示している。同書は「帰国子女校」であるK国際中学校の生徒に「バイカルチュラルアイデンティティ」が見られることを指摘しているが、本稿の公立高校の生徒にも同様な傾向があり、学校教育の可能性を示唆している。
- 6) 『外国人集住都市会議よっかいち 2005 報告書』p.63。
- 7) 広崎純子 (2001) 「都立高校におけるニューカマー生徒への対応」『早稲田大学大学院教育学研究科別冊』9-2 pp.35-45。
- 8) 朴三石 (2009) 『外国人学校 インターナショナルスクールから民族学校まで』中公新書 p.135。
- 9) A校はブラジルの私立学校が経営する幼稚部から高等部まであるブラジル人学校。太田市、浜松市、刈谷市、真岡市、南アルプス市、箕輪町の6ヶ所に拠点を持つ。A校の生徒数は2009年3月現在85名 (<http://www.pitagoras.com.br/COLEGIOS/japao/japao.asp>) B校は進学塾が経営する幼稚部から高等部まであるブラジル人学校で5校ある。今回調査したB校では2010年12月現在、390名の生徒が在籍している。(<http://www.alegriadesaber.jp/>)

- 10) 拝野寿美子 (2010) p.60 参照。
- 11) 小内透 (2009) 『在日ブラジル人の教育と保育の内容 (講座トランスナショナルな移動と定住一定住化する在日ブラジル人と地域社会 第2巻)』お茶の水書房。
- 12) 拝野寿美子 (2010) p.203。
- 13) 笹渕アンドレ順 『『間借り人』のつぶやき』『教育』782号 2011.3 国土社 p.58。
- 14) 同上笹渕アンドレ順 p.60。
- 15) 福岡安則 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』1993 中公新書参照。